

サン・ロケ教会所蔵の連作油彩画 『聖フランシスコ・ザビエルの生涯』第15番の解釈

中 井 博 康

1 はじめに

フランシスコ・ザビエル Francisco Javier (1506-1552) による東洋布教を主題とした芸術作品は、ザビエルが1619年に列福、1622年に列聖されるのを機に、特に17世紀以降、数多く制作された。17世紀前半のポルトガルを代表する画家アンドレ・レイノーズ André Reinoso (1590-1641) とその工房が、1619年、リスボンのサン・ロケ教会 Igreja de São Roque のために制作した二十点からなる連作油彩画『聖フランシスコ・ザビエルの生涯』*A Lenda de São Francisco Xavier* は、このようなザビエル賛美の絵画の中でも、傑作のひとつとされている。

このレイノーズの油彩画を、戦国大名大友氏研究の第一人者である鹿毛敏夫は著書の中で繰り返し取り上げ、特に『描かれたザビエルと戦国日本』では「日本においては(中略)ザビエルが訪れた戦国時代日本の三つの都市(薩摩の鹿児島、周防の山口、豊後の府内(大分市))での活動が描写され、ザビエルと討論する日本人僧侶たち、あるいはザビエルにすがろうとする日本人信者のようすが描かれていることなどは、ごく一部のキリスト教美術史研究者を除いてほとんど知られていない」(鹿毛2017, p.9)との認識から、連作画すべてをカラー写真で紹介しているが、その第15番の油彩画(図1)に「アンジローとともに鹿児島を進むザビエル」との題を付して、次のように解説している。¹

15は、薩摩の鹿児島でのザビエルのようすである。／画面では、日本に上陸したばかりのザビエルが、馬にまたがった男性に導かれながら素足

で鹿児島を先へと進んでいる。馬上の男は、アンジローである。(中略)／画面では、馬上から気にかけて振り向くアンジローに対し、ザビエルが「MAIS MAIS」と呼びかけている。日本語直訳では「さらにさらに」であるが、これは、待望の日本に上陸してこれから布教活動に邁進しようとするザビエルの希望と気迫にあふれた言葉といえよう。／背後に描かれた建物や林の中でたたずむ羊飼いのようすからは、一七世紀初頭のポルトガル人美術家の日本認識のレベルがインド認識ほど正確ではないことが判読できるが、しかしながら、ザビエルによる日本布教の第一歩が、鹿児島出身でマラッカに渡航していたアンジローの先導によって達成されたことを示す貴重な史料といえよう。(鹿毛 2017, p.39)

同様の解説は、1999年にザビエルの日本開教450周年を記念して開催された展覧会「大ザビエル展」の図録にも確認される。ザビエルの画像表現に関する著作もあるポルトガル美術史家のヴィトール・セララン Vitor Serrão は、この第15番の油彩画に「鹿児島に向かう聖フランシスコ・ザビエル St. Francis Xavier on the Way to Kagoshima」という題を付して、次のように説明している。

ザビエルは1549年6月24日にマラッカを發って日本へ向かった。新たに信徒になっていた薩摩出身のアンジローを伴っていた。白馬に跨るアンジローと思しき和装(?)の人物の背後をザビエルが裸足で歩む。その口元からは“MAIS MAIS”(更に更に)という言葉が洩れる。鹿児島上陸後、城下へ向かうふたりを描いているのであろうが、背景等はまったく想像の産物。この作品はほぼ全面的にレイノーズの協力者の筆になるものと思われる。横笛を吹く牧人の周りに群れる羊が描かれるなど牧歌的な風景が小さく見える。画家の情熱は伝わるものの、デッサンの仕方——特に日本人従者や馬の描写に関して——など依然としてマニエリスムの姿勢を踏襲しており力強さに欠ける。それゆえ本図はレイノーズの最初の師匠であるシマン・ロドリゲスの筆になる可能性のあることが推測される。(『大ザビエル展』, p.185)²



図1 サン・ロケ教会の油彩画
(鹿毛 2017, p.38)

ニュアンスに多少の違いはあるものの、以上を踏まえるならば、この第15番の油彩画は、少なくとも日本においては、鹿児島に上陸したばかりの素足のザビエルが、白馬に跨って先を行くアンジロー（と思しき人物）に、先を急いで「MAIS MAIS」と呼びかける様子を描いたものとして紹介されているとみなしてよいだろう。

しかし、このような解説を踏まえて第15番の油彩画を見直す時、それでは、なぜアンジローが馬に乗り、その後ろを彼の上司にあたるザビエルが素足で歩いているのか、むしろザビエルが馬に乗り、その馬の口をアンジローが取って引くのが自然ではないのか、という率直な疑問を抱かずにはられない。実際、この油彩画については、まったく別の解釈が存在する。しかも、同一の主題を扱った視覚表現は他にも複数あり、いずれにおいても、ザビエルとともに描かれている馬上の人物がアンジローであると断定するには、レイノーズの油彩画以上に、無理があるように思われる。

そこで本稿では、まずもうひとつの解釈を確認した上で、油彩画の主題に根拠を与えたと思われるザビエル伝などのテキストを参照し、同一の主題を扱った他の図像表現と照合することによって、「馬上の人物と徒歩のザビエ

ル」という主題の妥当な解釈とサン・ロケ教会所蔵の第15番の油彩画の特徴について、検討することにした。

2 騎馬の日本人と徒歩のザビエル——もうひとつの解説

聖人フランシスコ・ザビエルの図像表現を体系的に論じたトーレス・オリエータ Torres Olleta は、この第15番の油彩画を「ミヤコへの道中、日本人の馬丁となるザビエル (Javier espolique de un japonés camino de Meaco)」と題して、次のように説明している。

Sobre un paisaje bucólico en el que no falta un pastor con su rebaño que toca la flauta a la sombra de un árbol, el santo descalzo y con alforjas al hombro sigue a un caballero japonés de espuela dorada. De la boca de Javier salen las palabras «Mais, Mais», que sitúan la escena en un contexto de fatigas y penalidades. En la mentalidad de los siglos XVI y XVII, que una persona de origen noble se convirtiera en criado de otro, es un signo de humildad que resaltan todos los biógrafos (Teixeira, Rivadeneira, Lucena ...) y, cómo no, los predicadores. / En el ángulo superior derecho entre nubes y suaves resplandores se asoma Cristo que observa la escena y le envía haces de luz. (Torres Olleta, p.191)

羊の群れを連れた羊飼いが木陰で横笛を吹いている牧歌的な風景の中で、振り分け袋を肩に掛けた素足の聖人が、金色の拍車をつけて乗馬する日本人の後を追っている。ザビエルの口からは「Mais, Mais」という言葉が発せられ、疲労と苦痛の場面であることが示されている。16・17世紀のメンタリティーにおいては、高貴な人物が下僕になることは謙虚をあらわす記号であり、説教師はもちろん、Teixeira, Rivadeneira, Lucenaといった伝記作者も皆、強調しているものである。右上隅には、雲と柔らかな輝きの間からキリストが姿を見せ、この場を眺めながら光線を送っている。(訳文引用者)

馬上の人物については、アンジローへの言及がない一方、それが金色の拍車をつけていること、すなわち身分の高い人物であることが指摘されている。ザビエルについては、振り分けの荷物 (alforjas) を背負い、この日本人の馬丁 (espolique) あるいは下僕 (criado) となって、「Mais, Mais」という疲労と苦痛 (fatigas y penalidades) の言葉を発しながら、ミヤコすなわち京都に向かって

いるのだと解説されている。なお背景については、木陰で笛を吹いている羊飼いの他に、画面右上にザビエルを見守るキリストの姿が描きこまれている点にも触れられている。

ところがトーレス・オリエータは、以上の説明に続けて、次のような補足を加えている。

En el viaje de Amanguchi a Meaco (Mikayo [sic], la ciudad imperial que corresponde a la actual Kyoto), por ser invierno y la tierra montañosa y llena de nieve sufre el santo muchas penalidades. Como sucede en muchos cuentos de hadas topa con tres mercaderes, que van a caballo a sus negocios. El santo se ofrece como lacayo, para que le guíen hacia su destino, y sufre la falta de caridad de su amo, que le obliga a correr detrás de su caballo hasta el punto en que desfallecido, ha de agarrarse a la cola del animal. (*ibid.*)

山口 Amanguchi から都 Meaco (現在の京都にあたる首都, Mikayo [ママ]) へ赴く際には、冬で道が険しく雪が積もっていたため、聖人は大いに苦しむことになる。まるでおとぎ話のように、馬で取引に向かう三人の商人に出会うと、聖人は目的地まで連れて行ってもらおうと、馬丁となることを申し出る。冷淡な主人には、馬の後を走ってついてくるよう強いられるが、倒れそうになったため、馬の尻尾にしがみつかなければならなかった。(訳文引用者)

ザビエルが山口から上洛したのは雪が深い厳冬のことだったというのだが、それはおそらく、ザビエルの発する「MAIS, MAIS」という言葉が疲労と苦痛に起因するものだと解釈する、その理由を示すためだと推察される。しかし、第15番の油彩画に描かれた風景は、既に確認したように、木々が青々と茂り、その木陰で羊飼いが笛を吹いているという牧歌的なものである。そこには、トーレス・オリエータがわざわざ補足したような雪はおろか、冬を連想させるものは一切描かれてはいないし、三人の商人の姿を認めることもできない。

油彩画に反映されておらず、したがって補足としては蛇足ともいえる、このような「雪」と「商人」への言及は、他方で、「MAIS, MAIS」という言葉が画面に描きこまれた背景を理解し、その意味するところをより正確に解釈するヒントになっているように思われる。そこで節を変えて、素足のザビエルが乗馬する人物と移動するという、この油彩画のモチーフに対応する記述を、当時の書簡やザビエル伝により確かめることにしたい。

3 16 世紀における記録

まずザビエル自身の手になる書簡には、上洛の際の苦勞を除いて、今われわれが問題にしている場面に相当するような記述はない。そして、この上洛の様子についても、ヨーロッパのイエズス会士に宛ててコーチンでしたためられた1552年1月29日付の書簡第96番に、わずかな言及が見られるに過ぎない。

Estuvimos en el camino dos meses. Pasamos muchos peligros en el camino, por causa de las muchas guerras que había por los lugares por donde íbamos. No habló [sic] de los grandes fríos que en aquellas partes de Miaco hace, y de los muchos ladrones que hay por el camino. (Javier, p.407)

[山口から京都へは]二ヵ月の旅程でした。私たちが通った所でたくさんの戦があったために、途中でいろいろな危険に遭いました。ミヤコ地方のひどい寒さや、途中で出会ったたくさんの盗人のことについては、ここでは話しません(ザビエル, p.180)

この書簡では「話しません」と断って多くを語ろうとしないザビエルだが、その全書簡を邦訳し伝記も著している河野純徳によれば、「日本へ派遣する神父が備うべき徳についてイグナチオに書き送るとき、ザビエルは日本での経験から分かったこととして、実社会においてよく試練され、迫害を経験して自分自身の力を自覚している人たちでなければならぬ、と記している」ことは、「この旅路で経験した苦難を十分に物語っている」と指摘している(河野, p.241)。

日本におけるザビエルの布教の様子を詳細に伝えるものとしては、キリスト教日本布教史を編年的に記述したルイス・フロイス Luís Fróis (1532-1597)の『日本史』Historia de Japam が、そのもっとも早い例のようである。その第一部第四章でフロイスは、山口から京都に向かう時の様子を次のように描写している。

Parecendo ao P.e Mestre Francisco que era necessario, para cumprir como seo santo e determinado intento, prosseguir o caminho de Yamanguchi para o Miaco, se partirão, por aquelles nunca vistos nem conhecidos caminhos, oito dias antes do Natal, da hera ou fim de 50. E muitas vezes erão as neves tão grandes, que

lhe davão em partes pelos joelhos, e em outras dahi para riba. […] E[m] hum porto, que no caminho tomarão, hum homem honrado, por ouvir que o Padre era de Tengicu, compadecendo-se delle, pelo ver estrangeiro e pobre, lhe deo huma carta para hum seo amigo, cazado e morador no Sacai, pedindo-lhe que o encaminhasse com alguém que fosse para o Miaco. Este homem os agazalhou em sua caza e, sabendo que estava hum fidalgo nobre de caminho para o Miaco, os poz com elle, para que, hindo em sua companhia, fossem seguros de muitas portagens e ladrões, que havia no caminho. O fidalgo hia em huma liteira com seos pagens e mossos d' esporas, e o Padre Mestre Francisco hia ante elles a correr, atada a cabeça com hum biro de Sião, com mais alegria do que nunca se lhe vio mostrar em outro algum tempo. As neves erão mui grandes; e assim foi o Padre a galope aquellas 18 legoas, que há do Sacai ao Miaco. (Fróis, pp.35-6)

メストレ・フランシスコ師には、その聖なる、そして確固たる決心を実現するためには山口から都への旅を続けることが必要だと思われた。そして、一五五〇年の末、降誕祭の八日前に、それまで見たことも知りもしなかった旅路についた。幾度か積雪がはなはだしく、時には膝を没するばかりであり、あるいはそれ以上に達することがあった。(中略) 途次、一行が立ち寄ったある港で、一人の身分の高い男は、司祭が天竺から来た者であることを聞いた。そして彼は司祭が異国人で貧しい様子であるのを見て同情し、結婚して堺に住んでいる友人に宛てた書状を彼に与え、その中で、誰か都へ行く人があれば彼を伴わせてほしいと依頼した。この依頼された人は、一行を自分の家に泊らせ、一人の身分の高い貴人がちょうど都へ赴こうとしているのを聞くと、彼らをその人のところへ連れて行った。それは彼らが彼の伴侶となって旅行し、そうすることで道中の多くの通行税や盗賊から煩わされないようにするためであった。その貴人は小姓や馬丁たちを従えて駕籠に／乗って旅をし、メストレ・フランシスコ師は、シャム帽を頭に結びつけ、かつてどこでも見せたことがないような深い喜びを示しながら、一行の間を駆けて行った。積雪は非常に深かった。かくて司祭は堺と都の間の十八理を駆け足で進んだのであった。(フロイス, pp.16-7)

つまり、フロイスによれば、ザビエルは上洛する際、通行税や盗賊への心配から、小姓 (pagens) や馬丁 (mossos d' esporas) を従えて駕籠に乗る貴人 (fidalgo) に同伴して都を目指したということになる。トーレス・オリエータ

の補足と異なるのは、三人の商人への言及がないことだが、商人については巖島から堺まで船で移動した際の記述に、次のような描写が見られる。

Nesta embarcação estava, de dia e de noite, o Padre sobre a cuberta, assentado perto de huns mancebos mercadores, os quaes, conversando ao Padre, o tratavão bem de palavras. Deitou-se huma vez o Padre no logar de hum daquelles que alli hião. Indignou-se muito o gentio, e começou a deshonrar o Padre e vituperá-lo grandemente, sem elle lhe responder nada; antes o sofria com grande paciencia, mostrando-lhe no vulto hum sembrante triste. (*ibid.*, p.35)

この船の中で司祭は昼夜甲板で若い商人たちの傍に坐っていたが、彼らは司祭と語る際、丁寧な言葉遣いで彼と対応していた。だが司祭が一度、そこにいた人たちのうちの一人の席に横たわったところ、その異教徒はそれをひどく憤り、司祭を厳しく罵倒し叱責し始めた。しかし司祭は彼に一言も答えず、かえって憂いに沈んだ表情で彼を眺めながら、大いにそれを我慢していた。(同, p.16)

フロイスは、このようなザビエルの上洛の顛末を、彼に同行した修道士フアン・フェルナンデス Juan Fernández (1526?-1567) との談話によって知り、『日本史』を執筆する際には、その手記から書き写したと説明している。

Este capitulo foi tirado à letra de huns papeis que se acharão depois da morte do Irmão João Fernandes dahi a muitos annos, e às mesmas couzas se tinha elle mesmo referido em pratica em Yocoxiura e nas ilhas de Firando. (*ibid.*, p.38)

本章(に記載した)ことは、ずっと後年になって、ジョアン・フェルナンデス修道士の没後に見出された幾つかの書類から逐語的に採用したものであり、同様のことを、彼は(私、フロイスに)横瀬浦や平戸の島(度島)での談話の際に伝えてくれたのであった。(同, p.20)³

したがって、ザビエルの上洛の様子は、おおよそフロイスの記述のとおりだったと推測されるのだが、しかし『日本史』の原稿は、あまりにも浩瀚であることなどの理由により、その出版を上長のヴァリニャーノが許さず、その結果マカオのイエズス会文書館に留め置かれ、原文書は1835年に消失している(フロイス, p.1)。ザビエルの図像表現の典拠となるのは、むしろ、その後ひろく流通する一群のザビエル伝である。

4 記録から創作へ

ザビエル伝の元祖となったのは、ザビエルとも面識のあったイエズス会士マヌエル・テイシェイラ Manuel Teixeira (1536-1590) による『福者フランシスコ・ザビエル神父の生涯』*Vida del bienaventurado padre Francisco Javier* (1579) のようである (Torres Olleta, pp.26-7)。そこにはフロイスの『日本史』ほど詳細ではないものの、ザビエルの上洛の様子が同じように記述されている。

el P. Mtro Francisco, para pasar al Meaco, se avia hecho criado de un Japón gentil que iba á Meaco á caballo, y le llevaba mucha parte del camino un lío de hato á cuestas, yendo muchas vezes casi corriendo en pos del caballo, por no quedarse lexos dél, por ser el camino peligroso y de muchos ladrones. (Teixeira, p.878, Schurhammer, vol.4, p.241 に引用)

[ザビエルは] 都 Meaco に赴くため、馬に乗って上洛する異教徒の日本人の下僕となりました。道中のほとんどを、荷物を背負い、危険で盗賊の多い道ゆえに遅れを取るまいと、何度も馬の後を追って駆けていったのです。(訳文引用者)

フロイスの伝えるところでは、ザビエルは「小姓や馬丁たちを従えて駕籠に乗って」移動する日本人に同道し、道中罵声を浴びることはあったものの、その従僕となったわけではなかった。しかし、テイシェイラが描写するザビエルは、馬に乗って上洛する日本人の従僕 (criado) となり、彼に遅れまいと必死に走っている。⁴

このテイシェイラ原稿は出版されるに至らず、手稿のまま参照されたようだが、後にイタリア語やスペイン語に翻訳されて、後世のザビエル伝に大きな影響を与えることになる。その中でも、初めて活字となって広く流通することになるのが、イエズス会士オラツィオ・トルセッリーノ Orazio Torsellino (1545-1599) によるラテン語の伝記『フランシスコ・ザビエルの生涯』*De vita Francisci Xaverii*… (1596) である。このザビエル伝は1600年にはスペイン語に翻訳され、1603年には訳文はそのままに題名を『日本および中国へのキリスト教布教史』*Historia de la entrada de la cristiandad en el Japón y China*…と変えて再版されているが、その第六章においてトルセッリーノは、ザビエルの苦難に満ちた旅の様子を、実際にフェルナンデスから話を聞いた

というフロイスよりも詳細に活写している。

Púsose en él el Padre Francisco el año de mil y quinientos y cincuenta, por el mes de / Octubre, que es cuando comienzan los grandes fríos en el Japón: y así estaba entonces malísimo el camino, no sólo por las muchas piedras y guijarros que en él había, sino por la grandísima cantidad de nieve, de que estaba cubierto, la cual con el terrible frío se había congelado y empedernido. [...] Pero por ir más seguro entre aquellos bárbaros infieles, o por llevar guía de la tierra asentó por mozo de un japon, que iba al Meaco, teniendo por mucha honra suya hacerse siervo por Cristo. Iba el amo a caballo, y el Padre a pie, medio corriendo tras él, y llevado a cuestras y sobre sus hombros unas alforjuelas, en que iban algunas cosas de su señor, y el recaudo / para decir Misa, que traía siempre el Padre consigo. Iba el amo caminando casi a la posta en su caballo por miedo de los ladrones y salteadores, que había en el camino: el Padre iba siguiéndole medio descalzo, porque encontraba casi a cada paso ríos y arroyos, los cuales pasaba por el vado. Con esto y con la nieve y fríos que pasaba, llevaba los pies muy hinchados, y como iba agujando y cargado tropezaba, y caía muy a menudo, unas veces por la espereza y desigualdad del camino, otras deslizándosele los pies por el hielo. (Turselino, 181v.-182v.)

フランシスコ神父が旅路についたのは1550年10月のことでしたが、それは日本では寒さが厳しくなる時期でした。道は悪く、石や砂利だらけの上に雪が深く積もり、しかも寒さのために固く凍っていました。(中略) 野蛮な異教徒の中を安全に移動するため、また土地に不案内だったために、都 Meaco に赴くひとりの日本人の従僕となりましたが、キリストのために召し使われるのはむしろ名誉なことだとお考えでした。主人は馬に乗って移動し、その後ろを神父は徒歩で、半ば駆け足で追うのでした。その肩には振り分け袋を担いでいましたが、その中には、主人の荷物とともに、ミサのために神父が常に携行している祭具がはっていました。神父は半ば素足で主人の後を追いましたが、それは頻りに川や小川に道を阻まれ、浅瀬を渡るためでした。こういったことや雪や寒さのために両足は腫れあがり、荷を背負った上で急かされたためにつまづき、悪路に足を取られたり氷に足を滑らせて、よく転びました。(訳文引用者)

トルセッリーノの描写するザビエルもまた、馬で上洛する日本人の従僕

(mozo)となり、主人の荷物を背負わされて、彼に遅れまいと必死に走っている。さらには、その素足が腫れあがり、悪路や氷に足を取られて何度も転倒する様子が、こと細かに描かれている。

トレス・オリエータが言及していた「三人の商人」については、数多くの聖人伝を著したフランシスコ・ガルシア Francisco García (1641-1685) の『聖フランシスコ・ザビエルの生涯と奇跡』*Vida y milagros de San Francisco Javier* (1685)の第九章に、その例が確認される。

Era la mitad de Diciembre del año 1550, el tiempo rigurosísimo, / los caminos pedregosos, llenos de nieve, con el frío helada y empedernada [...] Como no sabía el camino, se juntó a tres japones que iban a caballo; y porque le enseñasen el camino, y le excusasen cierto tributo, que se pagaba en algunos puertos, se hizo lacayo de uno de ellos, y llevaba la maleta de su amo a cuestras sobre su pobre hatillo. Los japones iban ordinariamente corriendo la posta, por el miedo a los ladrones; y / el Santo, ayuno, flaco, fatigado, descalzo, herido, corría tras ellos, cayendo muchas veces; y levantándose con grande alegría, volvía a correr con gran prisa para alcanzar a su señor; y en las posadas cuidaba de los caballos el nuncio apostólico y el apóstol de tantas gentes. (García, pp.251-3)

1550年12月中旬のことであり、天気は厳しく、道は石だらけで雪が積もり、凍てつく寒さは容赦ありませんでした。(中略)道に不案内なため、馬に乗った三人の日本人と一緒にになりました。そして案内してもらうとともに税を免れるため、そのうちの一人の従僕となり、自分の粗末な包みに加えて主人の荷物を背負いました。日本人たちは盗賊を恐れて、たいてい馬を走らせて移動しました。聖なる方は、腹を空かせ、やせ細り、疲弊し、素足のまま、傷を負いながら、彼らの後を走って行きましたが、何度も転びました。しかし、喜びもあらわに立ち上がり、主人に遅れまいと、大慌てで再び走り始めるのでした。教皇および多くの人々の使徒である方が、宿では馬の世話をしたのです。(訳文引用者)

この三人の日本人が商人か否かは明らかではないが、少なくとも17世紀末には、ザビエルが一人ではなく三人の日本人に同道することになり、また従僕(lacayo)となって「宿では馬の世話をした」とあるように、馬丁としての役割が加えられていることが分かる。

こうして、苦難に耐え忍びながら上洛を目指すザビエルの姿は、アジアに

おけるキリスト教宣教のハイライトのひとつとして、他の奇跡譚とともにザビエル伝の中でいわば一定方向に脚色され定式化されて、演劇をはじめとする他のメディアにも取り入れられていく。

例えば、17世紀の作者不詳のザビエル劇『日本の霊的征服』*Conquista espiritual del Japón*において、ザビエルはポルトガル人船長のドゥアルテ・デ・ガマ Duarte de Gama に、都への苦難の旅を次のように語っている。

Caminé hasta Meaco / sirviéndole de criado / a un gentil que bien cargado / me llevó, aunque a pie tan flaco. / Por no saber el camino / me hube así de acomodar; / sin duda el allá llegar / fue especial favor divino, / que de otra suerte no dudo / hubiera desfallecido, / por entre fieras perdido, / muerto de hambre y desnudo. (*Conquista espiritual del Japón*, vv.2749-60)

都までは異教徒の従僕となって歩いて行きましたが、足元もおぼつかないのに荷を随分と背負わされました。道に不案内なために、そうするしかなかったのです。都まで行けたのは主の特別なご加護があったからに疑いありません。そうでなければ、野獣の中をさまよひ、食べるものも着るものもなく、必ずや行き倒れていたことでしょう。神の摂理により都まで行くことができましたが、そこで再び忍耐が試されることになりました。(訳文引用者)

また、数多くの戯曲を残したイエズス会士ディエゴ・カリエーハ Diego Calleja (1638-1725) は、同じくザビエルによる日本布教を主題としたイエズス会劇『東洋の太陽、聖フランシスコ・ザビエル』*San Francisco Javier, el Sol en Oriente*において、都への旅の様子を次のように描いている。大友宗麟をモデルにしたと思われる豊後の王ハリドノ Jaridono にザビエルの特徴を尋ねられた道化役ベキン Pequin は、ザビエルがいかに貧賤であるかを強調する。

Mas todo calle con que / para llegar a tu tierra, / desde Firando, sirviendo / vino de mozo de espuela / tras un postillón y asido / bien de la cola a las cerdas / corrió que se las pelaba. (Calleja, vv.315-21)

皆さんは唾然とすることでしょう、彼が平戸 Firando から殿下の国まで、馬丁となって馬の尻尾につかまり、その毛をむしらんばかりに必死になって走ってきたとお聞きになれば。(訳文引用者)

豊後を主な舞台としてザビエルによるアジア布教全体を総括的に描くこの戯曲においては、その苦難の旅が、堺から京ではなく、平戸から豊後への移動時のこととして語られてはいるが、しかしここでも、同時期のザビエル伝と同じく、ザビエルが馬丁 (mozo de espuela) となり、馬の尻尾につかまりながら走って移動していることが確認される。

5 騎馬の日本人と徒歩のザビエルの図像表現

「日本人の馬丁となって上洛を目指すザビエル」の姿は、アジアにおけるキリスト教宣教を表象するものとして、その生涯を描いた連作画において繰り返し取り上げられている。その中でも、ここまで確認したザビエル伝およびザビエル劇における描写にもっとも近いと思われるのは、キトのメルセー修道院 Convento de la Merced が所蔵する三十点の連作画の中の一点 (図2) であろう。この連作画は18世紀半ばに不詳の複数の画家によって制作されたものだが (Torres Olleta, p.239)、それぞれの作品に、それがザビエルの生涯のいかなる場面を描いたのかを明らかにする説明的な題が付されている。そして、図2については、次のように解説されている。

Yendo S. Francisco Javier de Amanguchi a Meaco en diciembre de 1550, por no saber el camino, sigue a un japonés asido de la cola de su caballo, llevando a sus espaldas la maleta como criado. (Torres Olleta, p.246)

1550年12月、聖フランシスコ・ザビエルは山口 Amanguchi から都に移動するが、道に不案内なため、ある日本人の乗る馬の尻尾につかまり、その荷を背負って後をついて行く。(訳文引用者)

白馬にまたがった男の装いは、上着といい帽子といい、目的地である都を表現するために画面左上に描きこまれた建築物と同じく、日本的というよりもむしろ中国的である。また、後ろを振り向くことなく馬を駆る様子は、サン・ロケ教会の油彩画第15番の人物がザビエルの方を振り向いているのと対照的である。しかし、素足で荷を背負い、シャム帽を被って馬の尻尾をつかんでいるザビエルの姿は、ザビエル伝における記述を忠実に再現しているとみなしてよいだろう。実際、右上に見える海と船もまた、堺まで船で移動したことを踏まえて描かれたものだと解釈できる。



図2 メルセー修道院の油彩画
(Torres Olleta, p.690)



図3 アロイオス病院のタイル画
(Torres Olleta, p.733)

同様の表現は、リスボンのアロイオス病院 Hospital de Arroios のタイル画(図3)にも確認される。この18世紀に制作されたタイル画では、馬上の人物はアジア的というよりもヨーロッパ的に表現されているが、キトのメルセー修道院の油彩画と同じく、ザビエルの方を振り向いてはおらず、ザビエルもまた右肩に振り分け袋を下げて、馬の尻尾をつかんでいる。

この二つの例と趣を異にするのが、ザビエル城 Castillo de Javier が収蔵する六点の連作画である。その内の一点に1692年の日付があるため、他の五点もその頃に制作されたものと考えられているが(Torres Olleta, p.216)、その中の一点(図4)に描かれた「騎馬の人物と徒歩のザビエル」は、二人が視線を合わせているなどの点で、サン・ロケ教会の第15番の油彩画とよく似ている。この油彩画の特徴を、トーレス・オリエータは次のように指摘する。

Tres rasgos importantes se pueden señalar como característicos de esta realización: en primer lugar el contraste entre el santo, que va de peregrino y descalzo, mientras el caballero japonés viste lujosamente, con turbante de pluma roja y pendientes de perlas, en un resumen del lujo oriental. En segundo, la importancia de la naturaleza, de la cual las fuentes textuales destacan siempre la dureza, y que aquí acoge manantiales, caminos y edificios. Y en tercer lugar la selección del momento pintado: frente a otras obras en las que el santo se ve obligado a correr cogido a la cola del caballo, en una ponderación de su extraordinaria humildad y fatiga de sus misiones, en esta se fija en el momento en que se concierta el trato. (Torres Olleta, p.220)

この作品の特徴として、三つの点を指摘しうる。一つめは、その対照性であり、旅装で素足の聖人に対し、馬上の日本人は赤い羽のターバンを巻き、真珠のペンダントをつけるなど、東洋の贅を尽くした豪華な装いをしている。二つめは、自然の豊かさであり、文献では常に厳しさが強調されているのに対し、ここでは泉や街道や建物が描き込まれている。三つめは、描かれている場面であり、他の図像では聖人が馬の尻尾につかまって走らされ、宣教がこの上なくみじめで苦しかったことが称揚されているのに対し、この図像では交渉が成立した瞬間が取り上げられている。(訳文引用者)



図4 ザビエル城の油彩画
(Fernández Gracia, p.290)

トーレス・オリェータが挙げる特徴の第一点(馬上の人物と徒歩のザビエルの対照性)と第二点(ザビエル伝に従えば厳冬であるべきなのに穏和な風景)は、ここまで見てきた他の図画にも同様に確認されることであり、このザビエル城の油彩画に限定されるものとはいえない。この作品で重要なのはむしろ第三の指摘、つまり馬上の人物と徒歩のザビエルが視線を合わせ、言葉を交わしているように描かれていることであり、その様子をトーレス・オリェー

夕は同道する交渉が成立した場面だと解釈している。鹿毛はサン・ロケ教会の第15番の油彩画について、馬上のアンジローがザビエルを気にかけて振り向いているところだと解説していたが、このザビエル城の油彩画に照らすならば、あの馬上の人物の仕草は、無事に上洛するために同行を願い出たザビエルと交渉しているところを示すものだったのである。

ところで、ここまで「騎馬の人物と徒歩のザビエル」を主題として描いた図像表現を比較し、それぞれの特徴を確認してきたが、いずれの場合もザビエルは「MAIS, MAIS」という言葉を発してはいなかった。それでは、この言葉は、どのような意味を担ってサン・ロケ教会の連作画に描き込まれているのだろうか。

6 「MAIS, MAIS」の意味

「日本語直訳では「さらにさらに」であるが、これは、待望の日本に上陸してこれから布教活動に邁進しようとするザビエルの希望と気迫にあふれた言葉といえよう」（鹿毛 2017, p.39）という解説に明らかなように、鹿毛は、第15番の油彩画においてザビエルの口から漏れている「MAIS, MAIS」という言葉を、宣教にはやるザビエルが先を急いで発したものとして解釈している。

ところが、これまで見てきたように、ザビエル伝においてもザビエル劇においても、厳冬の最中、都をめざしてひたすら苦難に耐えるザビエルの口から、この「MAIS, MAIS」という言葉が発せられることはなく、他の図像にも描きこまれてはいなかった。実はザビエルは、待望の日本に上陸する以前に、先を急ぐのとは異なるニュアンスをもって、この言葉を発しているのである。

例えば、先ほども参照したフランシスコ・ガルシアによる17世紀末のザビエル伝は、ザビエルが同僚のシモン・ロドリゲス Simão Rodrigues (1510-1579) とともにローマの病院で奉仕していた頃の出来事として、次のような逸話を伝えている。

Representóle también el Señor, no sé si en sueños o despierto, los inmensos trabajos que había de pasar, la hambre, sed, desnudez, caminos, fatigas, tempestades, naufragios, peligros, traiciones, injurias, desprecios, golpes, heridas, y otras muchas cruces que le esperaban en la India; mostrándole a este nuevo apóstol cuánto le convenía padecer por su nombre, como se lo mostró a San Pablo. Y Javier, sin espantarse de este ejército de penas y tropel de

muerdes que se le ponían delante armadas de piedras, saetas, venenos, espadas, cuchillos, haciendo cara a todas, y pareciéndole poco triunfo para su amor, le decía a Dios con ánimo invencible: Más, más, más. Estas palabras le oyó decir una noche el P. Simón Rodríguez, sirviendo los dos en Roma en el hospital (García, pp.30-1, 下線引用者)

「主はまた、夢の中でか起きている時にかは定かではありませんが、彼〔ザビエル〕が忍ぶことになる多大な苦勞を、インドで彼を待ち受けている空腹、渇き、貧苦、道程、疲労、嵐、難破、危険、背信、侮辱、軽蔑、殴打、負傷など、数多くの十字架をお示しになりました。聖パウロ同様に、主の御名のためにはどれほど耐えなければならないかを、この新しい使徒にお示しになったのです。ところが、ザビエルは、つぶてや矢や毒や劍や小刀で武装した、この苦難や死の大群を目の当たりにしても怯むことはなく、むしろ、これら全てに立ち向かうばかりか、主への愛に見合う勝利ではないとして、不撓不屈の心で「まだまだです」と神に言うのでした。ある夜、ザビエルがこう言っているのを、神父シモン・ロドリゲスは二人がローマの病院で奉仕していた時に耳にしました」(訳文引用者)

つまり、アジアにおける宣教活動が前途多難であることを予告する神に対し、それらの苦難が主への愛に見合うほどのものではないとするザビエルが、さらなる苦難を望んで「さらに、さらに (Más, más, más)」と言っているのである。⁵

そして、先ほども参照したキトのメルセー修道院の連作画の中には、このような予知的なヴィジョンがザビエルに対して示される場面を描いたものがあり、次のような説明文が付されている。

Significó el Señor a S. Javier los trabajos que había de padecer en las Indias mostrándole las cruces que le esperaban. El santo a esta vista exclamó: «Más, más, más, Señor»; pareciéndole todo eso muy poco para su grande amor» (Torres Olleta, p.242, 下線引用者)

「主は、聖ザビエルに、インディアスで耐え忍ぶことになる苦難を告げて、彼を待ち受ける十字架を示した。これを見て聖人は「主よ、まだまだです」と叫んだが、それは主への大いなる愛に比べれば、それらすべての苦難もわずかなものに思われたからだった」(訳文引用者)

そのザビエル伝において河野は、ザビエルが春を待たずに厳冬のさなか上洛の旅を執行した理由を、「神への奉仕のために危険や困難を受ける者に、神はかならず霊的な喜びを与え給う、という経験にもとづく確信があったから」（河野, p.241）だと説明しているが、「MAIS, MAIS」という言葉はまさに、そのような、神に奉仕するために嬉々として苦難を忍び、さらなる苦難を待ち望むという、ザビエルの霊的な喜びを意味していたのである。そして、ザビエルがこの言葉を発する時には「主よ」と神に呼びかけていることを踏まえるならば、サン・ロケ教会の第15番の油彩画に描きこまれた「MAIS MAIS」という言葉は、馬上の人物に向けられたものではなく、その頭上の雲の上からザビエルを見守っている神に対して発せられたものだったのである。



図5 メルセー修道院の油彩画
(Torres Olleta, p.683)

このようなインド宣教における苦難の予告は、ザビエルの生涯を扱う連作画においては、しばしば「インディオを担ぐザビエル」という、きわめて寓意的な表現によって具体的に視覚化されている。この主題を描く、キトのメルセー修道会所蔵の油彩画(図5)には、次のような解説文が付されている。

Fue elegido Javier para apóstol de la India por medio de un sueño, en que le parecía cargar sobre sus hombros a un indio y al mismo tiempo se le representaban los trabajos que le esperaban en el Oriente, para donde salió de

Lisboa el 7 de abril de 1641. (Torres Olleta, p.242)

ザビエルは、夢のお告げによりインドの使徒として選ばれた。夢の中で、インディオを肩に担ぐ彼の眼前に、東洋において彼を待ち受ける苦難が映し出された。そして、1641年4月7日、東洋を目指してリスボンを発った(訳文引用者)

つまり、東洋布教のパイオニアであるザビエルの艱難辛苦は、渡航以前を描く際には「インディオを担ぐザビエル」の姿によって、渡航以後を描く際には「騎馬の日本人を素足で追いかけるザビエル」の姿によって、視覚的に表現されているのである。

そして、さらなる苦難を求める言葉「MAIS, MAIS」と、インド(すなわちアジア)での苦難に満ちた宣教活動を象徴するインディオの姿は、例えばカリエーハのザビエル劇において、ひとつの場面に統合・集約されることになる。ここでは、ザビエルの来日に狼狽してアミダに託宣を求める日本人の眼前に、インディオを背負ったザビエルの幻影が示され、次のような掛け合いが展開されている。

S.J. Peso desigual, mi Dios, / mal sustentarle podré: / ¡ay Jesús mío!, yo iré, / mas conmigo habéis de ir vos. / ¡Jesús! ¡Ignacio! Los dos / me asistís: tú, Ignacio, das / este precepto, y tú estás, / mi Jesús, de parte mía, / pues con esta compañía / vengan más trabajos, más.

El indio como diciendo al santo.

Indio Del cristiano y del gentil / te arriesga en esta misión, / ya vana la estimación, / ya cruel la envidia vil. / Leguas treinta y cuatro mil / descalzo y pobre andarás, / naufragios padecerás, / hambre, desnudez, y frío.

S.J. Jesús mío, Ignacio mío, / vengan más trabajos, más.

(Calleja, vv.634-53, 下線引用者)

ザビエル 神さま、〔このインディオは〕途方もなく重いので、私は耐えられそうにありません。イエスさま、それでも私は行きましょう、ただ、あなたも一緒に来てください。イエスさま、イグナシオさま、お二人とも私と一緒に来てください。イグナシオさま、これを命じたのはあなたなのですから。イエスさま、あなたは私の味方なのですから。あなた方が一緒ならば、さらなる苦難にも耐えられます。

インディオが聖人に応える。

インディオ この伝道の旅では、あるいは見向きもされず、あるいは激しく妬まれて、キリスト教からも異教徒からも苦しめられるのだぞ。三万四千レグアの道程を、おまえは弊衣かつ素足で行くことになるろう。苦勞を、空腹を、貧苦を、酷寒を忍ぶことになるだろう。

ザビエル イエスさま、イグナシオさま、さらなる苦難にも耐えられます。(訳文引用者)

ここでザビエルの背負うインディオが、アジア布教の困難を象徴し(「途方もなく重いので、私は耐えられそうにありません」、具体的な地名に言及してはいないものの、「三万四千レグアの道程を、おまえは弊衣かつ素足で行くことになるろう。苦勞を、空腹を、貧苦を、酷寒を忍ぶことになるだろう」という台詞が、山口から上洛する苦難の旅を反映させていること、そして「さらなる苦難にも耐えられます (vengan más trabajos, más)」という台詞が、サン・ロケ教会の油彩画第15番に描きこまれた「MAIS, MAIS」と呼応していることは、ここまでの考察から明らかであろう。

7 結び

アンドレ・レイノーゾとその工房が、リスボンのサン・ロケ教会のために制作した連作油彩画『聖フランシスコ・ザビエルの生涯』の第15番は、日本では、鹿児島に上陸したばかりのザビエルとアンジローを描いたものとして紹介されている。しかし、ザビエル伝における記述や同主題を描いた他の図像に照らし合わせるならば、この油彩画は、鹿児島ではなく、山口から上洛する際の苦難の旅の様子を描いたものであり、馬上の人物はアンジローではなく、無事に都までたどり着くためにザビエルが馬丁として仕えた貴人あるいは商人であることが分かる。また、ザビエルの発する言葉「MAIS, MAIS」という言葉も、神への愛に見合った苦難を望む声として描きこまれているのであり、宣教に勇み立って「もっと先へ」と言っているのではない。第15番の油彩画の特徴はむしろ、一般的には「インディオを背負うザビエル」という定式化された寓意によって表現される、アジア布教の困難とザビエルの信仰の深さが、「MAIS, MAIS」という台詞としてザビエルの口元に描きこまれていること、そして、これによって「騎馬の日本人と徒歩のザビエル」と「インディオを背負うザビエル」という、通常はそれぞれ独立して描かれる二つの主題が、ひとつの画面の中に統合されていることにあるだろう。

注

- 1 鹿毛は、これ以前の著書、すなわち『アジアン戦国大名大友氏の研究』(2011)では題名を付しておらず、『大航海時代のアジアと大友宗麟』(2013)においても「アンジロー」の名を含めずに「ザビエルの日本の鹿見高への旅」とするにとどめている。
- 2 原文のポルトガル語は図録には収録されていないが、この連作油彩画について考察した研究書(Serrão 1993)においても、セランはほぼ同じ解説をしている。ただし、1993年の時点では、まだアンジローの名には言及しておらず、単に「ある日本人改宗者 (um convertido nipónico)」あるいは「日本人同行者 (companheiro japonês)」と表現するにとどめている (Serrão, p.86)。
- 3 ジョアン・ロドリゲス João Rodrigues (1561-1633) もまた、その『日本教会史』*História da Igreja no Japão* 第三卷第一六章を執筆するにあたり同様の方法をとったと記している。「この旅行で福者パードレ、フランシスコが経験した大きく限らない労苦、生命の危険、侮辱、必需品の不便などは言葉で容易に言い表すことができない。しかし福者パードレの同行者で高德の人イルマン、ジョアン・フェルナンデスが後になってそれらについて述べている。われわれはそれらが書きしるされているのを見たうえに、パードレたちと交わり、実際にこのようなことをいろいろと目撃した人たちから話を聞いたのである」(ロドリゲス, p.430)。またフロイスほど詳細ではないが、上洛の様子についても『日本史』と同様の記録を残している。「この堺 Sacay から都 Miaco への道はわれわれの十四レグアちかくあったであろうが、追剥ぎや兵士がいるので、パードレたちは急ぎ足で歩きつづけた。また馬に乗っていく貴族のために、パードレたちは従者や馬丁の役をして、その荷袋を背負ってやった。だが、とにかくパードレたちは異国人であったので、兵士どもは彼らをひどく嘲り、つらく当たることをやめなかった」(同, p.436)。
- 4 ザビエル研究の第一人者であるシュルハンマー神父は、テイシェイラをはじめ、ザビエル上洛の旅に関して伝記作者が提供する情報の多くが誤ったものであることを指摘している (Schurhammer, vol.4, p.241)。
- 5 ザビエルが主への愛ゆえに嬉々として苦難を望む様子を記録したものとしては、例えばロドリゲス『日本教会史』にも、堺で野宿した際の出来事として、次のような逸話が収録されている。「そこに、都市の子供が彼らを見るために群れをなしてやって来た。そして悪口や罰当たりの言葉をさんざん浴びせながら、石を投げつけ、彼らにひどい乱暴をはたらいた。このように彼らはすべての人にとって嘲笑的となった。聖人はこのようなことのすべてに耐え、さらにはわれらの主なるキリストへの愛のためにさらに多くのことに耐えるように望んでいたので、これらのことを侮辱とは思わず、むしろこれを大いに喜んでいたほどであった」。(ロドリゲス p.435, 下線引用者)

主要参考文献

- Calleja, Diego, 2006, *San Francisco Javier, el Sol en Oriente*, Ignacio Arellano (ed.), Madrid, Iberoamericana.
- Coloquio de la conquista espiritual del Japón hecha por San Francisco Javier*, 2010, Celsa Carmen García Valdés (ed.), Pamplona, Universidad de Navarra.
- Elizalde, Ignacio, 1961, *San Francisco Xavier en la literatura española*, Madrid, Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Fernández Gracia, Ricardo, 2006, *San Francisco Javier Patrono de Navarra. Fiesta, religiosidad e iconografía*, Pamplona, Gobierno de Navarra.
- Fróis, Luis, 1976, *Historia de Japam*, edição anotada por José Wicki, vol.1, Biblioteca Nacional de Lisboa.
- García, Francisco, 1908, *Vida y milagros de S. Francisco Javier de la Compañía de Jesús, apóstol de las Indias*, Madrid, Apostolado de la Prensa.
- Javier, San Francisco, 1953, *Cartas y escritos de San Francisco Javier*, Félix Zubillaga (ed.), Madrid, Editorial Católica.
- Rodríguez G. de Ceballos, Alonso, 2007, “Las pinturas de la vida de San Francisco Javier del Convento de la Merced de Quito: fuentes gráficas y literarias”, *Anales del Museo de América*, 15, pp.89-102.
- San Francisco Javier en las artes: el poder de la imagen*, 2006, Pamplona, Gobierno de Navarra.
- Schurhammer, Goerg, 1992, *Francisco Javier: su vida y su tiempo*, 4 vols., Pamplona, Gobierno de Navarra.
- Serrão, Vítor, 1993, *A Lenda de São Francisco Xavier pelo pintor André Reinoso*, Lisboa, Santa Casa da Misericórdia de Lisboa.
- Torres Olleta, María Gabriela, 2009, *Redes iconográficas: San Francisco Javier en la cultura visual del barroco*, Madrid, Iberoamericana.
- Tursellino, Horacio, 1603, *Historia de la entrada de la cristandad en el Japón y China y en otras partes de las Indias Orientales*, Valladolid, Juan Godínez de Millis.
- 鹿毛敏夫, 2011, 『アジアン戦国大名大友氏の研究』, 吉川弘文館.
- 鹿毛敏夫, 2013, 『大航海時代のアジアと大友宗麟』, 海鳥社.
- 鹿毛敏夫, 2017, 『描かれたザビエルと戦国日本』, 勉誠出版.
- 河野純徳, 1988, 『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』, 平凡社.
- ザビエル, フランシスコ, 1992, 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』, 河野純徳 訳, 第三巻, 平凡社.
- 『大ザビエル展』, 1999, 東武美術館, 朝日新聞社.
- フロイス, ルイス, 1977, 『日本史』, 松田毅一・川崎桃太 訳, 第一巻, 中央公論社.
- ロドリゲス, ジョアン, 1970, 『日本教会史』, 池上岑夫他 訳, 下巻, 岩波書店.